汲古一心

『陶淵明に想う』

中国でもそうなのかどうか知りませんが、中国各時代を通じて大変人気のある詩人中でも、特に陶淵明とか蘇東坡とか高青邱の詩は、実によく書道展で見かける。

そのほかに僧門、ことに禅宗系のものでは寒山詩を筆頭にして詩・偈・語録の類もかなりひろく書かれている。

一体これはどういうことなのかいちいち追求してみたら大変おもしろいのではないかと思うが、今私が題として掲げた「陶淵明」については、「帰去来の辞」その他の文を相当多く人口に膾炙して、随分使用頻度も高く、熟語化した語句も多く知られている。

しかも彼が帰去来辞などによって、その人柄も相当識られているのは、李白・白楽天・蘇東坡などとよく似ている。本人は老荘哲学系の人であるのに、彼は後世の儒学者のように詩の中でもハッキリと――人生再び同じ日は来ない。学ぶべき時に必ず努力するところがなくてはならない――といったり、仏教哲学系の諦観に近いものを謳いあげている。とにかくもその親しかったと伝えている交友たちを見れば、その風格も自明であろう。

古代隠逸詩人の第一と推されているし、東晋の地方祭酒（学長）でもあったのだから、単なる田園詩人、隠逸者とは違うのであろう。説は明確ではないが、相当の名門の出身と伝えているが、その学といい詩調といい、まあそうであったであろうことに違いはあるまい。それが時の風雲の裡にいて浮き沈みがあり、同郷の後輩らしいのが中央政府の高官となって、地方知事くらいの地位にいた彼の行政を視察に来たのだという。官について八十日ほどしか経っていなかった彼が慇懃にこれを迎える――というのは無理だったらしい。冠を脱ぎ、印綬を解いて、帰去来辞一篇を遺して郷里へ帰ってしまった。

今日でいうプライドが許さないといったところだろう。がしかし、清朝の文人知事だった趙之謙になると話しが違ってくる。陶淵明が――われ五斗米（知事の俸給）のために何で郷里の小児（後輩のこと）に見えんや――といって去ったのに対し――われは五斗米のために腰を折る――といった印まで刻して、知事の椅子に甘んじていたのも中国人の気質の多様性が判るようにも思われる。

こんなところに惚れただけでもないであろうが、この気骨と徹底した田園詩人の風格とをいろいろと取り入れて、その文学は書作品に作られまた愛唱されてもいるようである。明治のご維新に顛落した好学の士分の人たちに、この気取りのあった人が大分いて、新政府の成り上がり（急に出世の運をつかんだ者）に対するねたみで、むずかしい空気が方々にあったらしい。また陶のような気位を嫌って素直にその境遇に甘んじて暮らすのがよいといった者も、一種のあきらめ派としていたことも事実である。というよりこの方が数からいえばむしろ多かったのではあるまいか。

今の筑波大学の前身東京高等師範学校時代、漢文の教授として令名のあった簡野道明先生などは、その編著の中の『和漢名詩類選評釈』と題する明治書院刊行の一本は『字源』と並んで最も普及したものであるが、私がいまでも不可解なのは、この中国名詩家の中に陶淵明の詩は一首も採択されていないことである。何かにご意見が述べられているかもしれないが寡聞にして判らないままである。

こうなると人間勝手なことを考えて、先生は旧幕臣系から出て、当時の官学に仕えた方かナ、とも想像したりもするのである。実はもう遠いところでは「明治の三舟」と呼ばれた書家の一人、高橋泥舟翁などはそのひとり。大久保利通侯に推挽されて、旧幕の大老伊井掃部守近侍の家に生まれた日下部鳴鶴翁なども、その大久保侯が殺されると早速太政官大書記官の職をすてて官途を離れてしまった。

明治末まではまだこんな人は大分いて、稜々たる気骨がチラリと不用意のところにみられた。（つづく）

〈『書範』、昭和五十七年六月〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集（昭和六十三年刊）より転載。